

教育研究業績書

2018年05月14日

所属：看護学科

資格：准教授

氏名：久山 かおる

研究分野	研究内容のキーワード
在宅看護学	訪問看護、在宅看取り、多職種連携
学位	最終学歴
博士(保健学)	鳥取大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 在宅看護学Ⅱ演習の工夫	2017年4月～2017年8月	在宅看護学の演習において、学生が療養者、家族、訪問看護師の役をし、簡易に作成した室内で訪問看護の初回訪問場面のロールプレイを実施した。学生は訪問者としてのマナーの実際を学び、言動が他者に与える影響について考えることができた。また、胃瘻周囲の皮膚ケア、CVポートの演習の際、学生の理解が深まるように演習用品を検討した。
2. 高大連携 入学前教育	2017年2月21日	入学予定の内部進学を学生を対象に「本学学科の特徴」「互いの価値観を知ろう」「あなたを取り巻く社会を知ろう」をテーマにグループワーク、講義を実施した。学生は熱心にグループワークに参加し、入学へのモチベーションを高めた。
3. 2期生担任業務	2016年4月～現在	2期生A組を担当。学生の状況に目配りし、悩みがある様子がかがえた時には声掛け・面談を実施している。健康面、生活面へのアドバイスや経済状況の変化などについては、修学の継続に向けて、学生課への相談を勧奨している。保護者から学生の相談を受けることもあり、関係は良いと感じている。
4. 大学院授業：広域実践看護学総論（在宅看護学）	2015年9月～2016年1月	2015年度：修士学生11名の授業5コマ担当。教員の実践活動からの在宅での事例、研究の動向などを提示し、ディスカッションを実施した。 様々な立場にある大学院生にとって、現場での連携方法や実践に生かせるヒントとなることや自らの課題を深める時間であると評価を得た。
5. 大学院生への副指導教員としての指導	2015年4月～現在	2015年修士課程の学生2名に対し、文献レビュー、研究計画の立案、論文作成に向けての指導、および学会発表の準備や助成金獲得に向けての指導も行った。インタビューの模擬授業など、職場でも生かせる助言・指導を行っている。 教員の実体験を語ることにより、共感を持って社会人である院生のモチベーションを高めることに役立った。 2016年修士学生へも同様の指導を実施、訪問看護ステーションの立上げ・経営の教員の体験が院生の研究の参考となっている。
6. 在宅看護学概論（歴史の中に自らの歴史を刻む）	2015年4月～現在	2025年問題の時に学生は30歳。今後、本学の学生は、時代の変革の中で中心となって働くことになる。今までの時代の流れそして現状を理解して、今後を予測できる力を身につけるために、学生の苦手な内容である歴史についての教授法を工夫した。 教員が準備した医療・福祉の年表の中に自分や家族に関連する日付や出来事を記入させた。また、明治時代の訪問看護の歴史的出来事については当時の写真を準備し、歴史を身近に感じられるように工夫した。
7. 学部授業：他領域科目との連携	2012年4月～2014年3月	学部授業において、老年看護学と連携し、同一の高齢者の事例を用いて授業を行った。疾患理解と疾患が生活に与える影響とその生活をどのようにサポートしていくの学びを深めていった。同一事例により、学生は在宅から入院、施設、在宅など一人の世話が継続していることを理解した。
8. 医療機器の理解と看護	2012年4月～2014年9月	「在宅看護学演習」において、医療的管理を理解するために、NPPV、HOT、腹膜透析など医療機器メーカーを招聘し、医療機器の装着体験など実際に学んだ。その後、生活の中で支援する看護職の役割についてグループワークを実施した。学生は療養者の体験を一部でも感じることで、看護職としてどのようにかかわっていくのかを考察することができた。
9. 特別学期（ゼミ）地域交流の場創りへの参加型学習	2005年4月～2007年3月	ゼミ生（5～15名）。高齢者、障害者、地域住民と学生の交流の場・地域の居場所づくりをすることを目的とし、年間3回の交流会（ほかほか交流会）を実施した。地域自治会との調整、ボランティア招集を学生主体となり実践できるように教員は指導していった。また、地域実践活動内容を、かかわりのあった複数の地域で、研究発表会を行い学生全員がプレゼンターとなった。抄録作成指導や発表練習を重ねるうちに、人前で話すことに臆することがなくなったという学生もいた。一人ひとりの個性の

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
10. 当事者の参加型授業を企画	2004年4月～2013年3月	<p>中で、学生は成長した。また、交流会の様子、学生の活動については行政、地域も関心を寄せ、複数のマスコミに取り上げられた。</p> <p>障害とともに生きる人の理解を深めるために、高次脳機能障害のある青年とその家族、30歳の子育て中の聴覚障害者の当事者を招聘し、自らの生活について体験談を聴講し、学生とともにディスカッションを実施した。</p>
2 作成した教科書、教材		
1. 事例による療養者の理解 ワークシート作成	2013年4月	<p>在宅で暮らす療養者の事例を提示し、その療養者の発言や生活状態の観察により学生はどのようなイメージを持つか、ワークシートにそって考えていった。学生は療養者に対して抱いた最初のイメージをワークシートに記載、グループ内でもイメージ共有をしたのちに、療養者の述べた言葉が明かされるという流れになっている。自らのイメージと療養者の話す内容が異なることなどから、療養者の思いを理解するように授業は流れていく。話が進むうちに、療養者の気持ちや、人間としての強みに気づく内容になっている。</p>
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 鳥取県看護協会研修会講師	2016年8月	120名の看護師を対象に1日（5時間）「その人らしい最期を迎えるために～望む場所での終末期・看取りを支える看護にの役割」について講義を実施した。
2. 看護職卒後教育 看護職員研修研究方法 講師	2010年10月～2012年3月	テーマ「看護研究入門―探究心を持って研究にチャレンジしよう」と題し、研究初心者にも理解できるように研究計画書の作成を中心に講義を実施。また、継続的に研究発表の指導を行った。
3. 鳥取県キャリア形成事業講師（平成22年度～23年度）	2010年10月	介護現場に勤務する看護師、介護福祉士を対象。平成22年度は小規模多機能施設、通所介護事業所職員を対象に「根拠に基づいた介護技術」「高齢者の障害の理解」「福祉の現場における看護職の役割」を実施した。
4. 主任介護支援専門員養成研修講師	2009年7月～2012年11月	主任介護支援専門員を養成する目的で実施。訪問看護を経験し、医師会や多職種とのネットワークづくりを行ってきた実績をもとにした講義内容の依頼が主催者からあり、事例を用いた具体的な内容とした。「高齢者の疾病」「訪問看護・医療との連携」を担当した。
5. 鳥取県介護施設職員レベルアップ研修講師	2008年9月	介護施設に勤務する看護師、介護職を対象に、「エビデンスに基づくケアと連携」について講義をした。
6. 鳥取短期大学公開講座講師「死をどう看取るか（死と看護）」講師	2008年8月	在宅の看取りについて、訪問看護師の経験をもとに講演した後、看取り体験を持つ家族との対談を実施した。
7. 鳥取県教職員10年研修講師	2007年8月	高等学校教員の10年研修において、保健・医療・福祉の動向、近年のケア方法についての講義を実施した。
8. 鳥取県西部歯科衛生士会研究会講師	2005年4月～2008年4月	歯科衛生士を対象に①「在宅ケア―連携について」訪問看護師の役割とその連携方法 ②「行動変容のためのコミュニケーション技法」コミュニケーションの基本と実際について講義した。
9. 日本看護協会がん認定看護師継続研修 ジュネラリストの教育講師	2004年9月	「がん看護のステップアップ―家庭介護―」島根大学医学部看護学科 人見教授らとともに講師を務める。担当「看護者から見た患者家族の様子とその関わり」、看取りをした患者家族の体験談の後に実施されたグループワークにファシリテーターとしても参加した。
10. 日本看護協会 がん看護認定看護師継続研修	2004年10月	テーマ「がん看護のステップアップ―在宅ターミナルケア―」島根大学医学部看護学科 人見教授らとともに講師を務める。「在宅看護、訪問看護のターミナルケアの状況について」を担当し、事例を用い講義を行う。グループワークファシリテーターとしても参加した。
11. 第32回日本看護学会シンポジウム（地域看護）	2001年3月	シンポジストとして参加。シンポジウム「ここが違う」看護職のケアマネジメント―実践を通してのケアマネジャーの枠割と課題― 介護保険制度の中で看護職が看護の専門性を高め、信頼されるケアマネジャーとしてどのようにしていけばよいのかを提言した。
12. 「こうすればよくなる！！介護保険」	2001年12月	コミュニティケア12月号日本看護協会出版会、p.30 介護保険制度の矛盾、認定調査、サービスの質、報酬など、ケアマネジャーの倫理について提言した。
13. 市民大学、市民対象公開講座講師	1999年4月～2010年3月	地域住民を対象に「在宅看護」「介護保険と私たちの暮らし」「転倒予防教室（講演と劇）」「住宅改修と福祉用具の活用」など、医療・福祉など多岐にわたり講演、地域で好評を得、年間8～10か所で講演・劇を実施した。
14. 病院看護職員研修（鳥取大学医学部付属病院、国立病院）	1999年1月～2000年1月	合計4回実施。テーマ、継続看護「看護をつなぐ」。病院と地域との連携不足によって生じるケアの空白期間が寝たきりの一因となること、看護師の果たすべき役割など、事例をもとに報告した。この講演の後に、地域の訪問看護ステーションへの依頼が増加した。
15. 臨地実習指導の工夫	1998年10月～2004年3月	実習施設側の地域統括部長として、看護実習の受け入れ体制を構築。実習指導マニュアルを作成。在宅看護論実習では、生活者としての療養者とその家族の生活を知る

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
		ことや、多職種連携、連携する看護師の役割を学ぶことに力点を置いた。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 社会福祉士	2005年4月	(第67074号)
2. 福祉住環境コーディネーター	2001年4月	
3. 介護支援専門員	1999年4月	(第645号)
4. 看護婦免許	1978年4月	(第333210号)

2 特許等		
--------------	--	--

実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 兵庫県看護協会阪神南支部 教育委員	2017年7月～現在	兵庫県看護協会から委嘱を受け、月1回の会議に参加。研修会の企画・運営を担当している。
2. 大学運営に関する事項	2015年4月～現在	入試業務として看護系大学入試説明会への出務、見学会での高校生への大学概要説明、オープンキャンパスでの担当（相談室、実習室）、大学入試の試験監督業務を担当した。 大学院において、試験問題を作成した。
3. 社会福祉・保健サービス評価事業評価委員	2008年10月～2011年3月	社会福祉協議会より任命。福祉サービス施設の調査員の調査結果をもとに第三者評価を実施
4. 倉吉市虐待防止対策委員会委員	2007年4月～2014年3月	倉吉市より委嘱。居宅介護支援事業所、地域包括支援センターの職員が抱える虐待が疑われる事例、困難事例への対応について協議した。
5. 社会福祉・保健サービス評価事業評価調査官	2006年4月～2013年3月	地域密着型施設への第三者評価の訪問調査を年間5～8実施。
6. 米子市地域福祉計画策定委員	2006年4月～2015年3月	米子市より委嘱。第1期策定から参加。地域に出向きワークショップを開催し、その中から地域課題を抽出していった。
7. 鳥取県ケアプラン指導チーム指導員	2001年4月～2003年3月	鳥取県より委嘱。ケアマネージャーの質の向上を目指し、県内に3名配置された、介護支援専門員に対して、事業所へ出向き、ケアプランの作成の助言や悩みなどを聞き、スーパーバイザーとしての役割を果たした。
8. 鳥取県西部認知症高齢者ケア検討会委員	2001年10月～2003年3月	米子市より委嘱。認知症の人の介護家族、行政との会議に有識者として参加。地域の認知症ケアについて検討していった。
9. 鳥取県西部広域連合介護認定審査会委員	2000年～2010年	鳥取県西部広域連合より委嘱、2004年より広域連合介護認定審査会副委員長に就任
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. やさしさの在宅ケア	共	2009年7月	ふくろう出版	事例第2章「同世代の3人の子供を持つ母親の看取りに関わった中で見えてきた看護師の潜在意識」p. 150～160を執筆。 看護師はその人間性や個人的体験などが看護行為に影響を及ぼす仕事である。本事例は、看護師自らの体験をもとに、看護師は自らを内省する必要があることを提起した。編者：人見裕江 分担執筆者：金山時恵、久山かおる、郷木義子、小中綾子、斉藤一江、斉藤美智子、佐々木純子他)
2. 介護体験から学ぶ認知症「想いを見つめる」	共	2007年12月	NPO法人地域福祉ネットワークブックレット	認知症の人を介護した家族への介護体験インタビューを実施。執筆。 本人担当部分：事例p. 12. 60、参考資料、p. 62～70担当。 共著者名：久山かおる、吉野立
2 学位論文				
1. 認知症対応型グループホーム職員の看取りと死に関する態度 - 訪問看護ステーション職員との比較- (博士論文)	単	2014年1月	鳥取大学医学院医学系研究科	グループホーム・介護老人福祉施設職員・訪問看護・病院に勤務する職員を対象に、死生観や看取りに関わる態度について調査した。死についての授業体験や看取り研修体験は、施設や資格によって差がみられ、死生観や看取りに関わる態度にも違いがみられた。また職種による研修体験の違いにより、死生観や看取りに関わる態度が異なることが確認された。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
2. 認知症高齢者グループホーム看取りに関わる体験が死生観に及ぼす影響」 修士論文	単	2010年3月	鳥取大学大学院医学系研究科	近年増加しているグループホームにおける看取りの事業所実態把握と職員の死生観を調査した。A県内の53事業所の職員の全数調査を実施した。その結果、事業所の設立主体運営方法など全国調査とは異なる結果が認められた。また死生観調査では、職種による違いはみられなかった。友人の死は死生観に影響を与えることや、男性既婚者が女性に比べ死の不安が強いことなどが明らかになった。
3 学術論文				
1. 日本語版攻撃的行動に対する態度尺度 (J-ATAS) の信頼性と妥当性 (査読付)	共	2017年2月	武庫川女子大学看護学ジャーナル、vol102、p 65-73.	本研究では、ヨーロッパ5カ国4言語で信頼性と妥当性が検証されたATASの日本語版 (J-ATAS) を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。主成分分析の結果、J-ATASは英語版の5因子構造とはならず、3因子構造を示した。また、内的整合性の評価では、第1因子においては概ね良好な値が得られたが、第2因子、第3因子では十分とは言えなかった。以上のことから、現段階におけるJ-ATASは、ATASの日本語版として本邦で活用するには、十分な信頼性・妥当性を有しているとは言えない結果となった。認知症の人の攻撃的行動に対する我が国のスタッフの態度を測定するには、J-ATASおよびその開発プロセスの課題を踏まえた新たな尺度を開発する必要がある。データ分析、論文執筆 (ページ特定不可) 共著者名 中平みわ、人見裕江、久山 かつおる
2. 認知症高齢者グループホーム職員の看取り体験の思い (査読付)	共	2016年2月	武庫川女子大学看護学ジャーナルVol1011、p 45-52	グループホーム (GH) において看取りをした職員の思いを明らかにする目的で「GHで看取りをした思い」を自由記述で求めた。81名から回答があり、その結果、《看取りへの緊張と不安》、《後悔と心残り》、《ケアの手ごたえ》、《亡くなった人への敬意》、《看取れたことへの誇り》、《死生観の醸成》、《身内意識に伴う喪失感》に分類できた。看取り体験をした職員は自らのケアに不全感を感じつつも、実施できたケアには満足を感じていた。個人的な思いとしては肯定的なものが多く、看取りが人間的成長を促すきっかけになることがうかがわれた。さらに、入居者の死を身内の死のように感じるGH特有の看取り観が明らかになった。研究計画、調査、論文執筆など全体にわたり中心に実施した。共著者名 久山 かつおる、大森 眞澄、吉岡 伸一、中平 みわ
3. 認知症対応型グループホーム職員の看取りと死に関する態度 -訪問看護ステーション職員との比較- (査読付)	共	2014年1月	米子医学雑誌 65巻第1号、p. 6~18	グループホーム職員と訪問看護に勤務する職員を対象に、死生観や看取りに関わる態度について調査した結果、死についての授業体験や看取り研修体験は、施設や資格によって差がみられ、死生観や看取りに関わる態度にも違いがみられた。また職種による研修体験の誓いにより、死生観や看取りに関わる態度が異なることも分かった。互いの死生観や死に関わる態度を知ることで、相手の立場を理解し、その内容に沿った助言も可能になり、互いの連携に繋がることが考えられた。本人担当部分：研究計画、データ分析、論文執筆全般を担当。共著者名：久山かつおる、吉岡伸一
4. 認知症対応型グループホーム職員の看取り体験と死生観の関係 (査読付)	共	2013年4月	介護福祉学 20 (1)、p. 4~43	グループホーム職員の看取り体験と死生観との関係を明らかにし、グループホームの看取りケアを向上させるための基礎資料を得ることを目的に、A県内の事業所728人を対象に調査を実施した。「死後の世界観」「寿命観」「死からの回避」は、男女間で有意差が見られた。死を考える機会となった教育を受けた者や友人の死の体験のある者はない者に比べて死からの回避の得点が有意に低かったが、家族の死は死生観得点に影響がなかった。今後、看取りや死に関する研修が必要であることが示唆された。本人担当部分：研究計画、データ分析、論文執筆。共著者名：久山かつおる、吉岡伸一 (平成26年日本介護福祉学科奨励論文賞受賞論文)
5. 介護福祉士養成校修了生の研修ニーズ実態調査 (査読付)	共	2012年6月	鳥取短期大学紀要第65号、p. 9~16	養成学校1施設の修了生を対象に調査 (15年間)、現在の役割、職業満足度、研修ニーズを調査した。医療的な対応や家族との対応など希望は高く、修了校への研究の期待は高く、学校における今後の役割が示唆された。本人担当部分：データ分析、論文検討。共著者名：井手添陽子、久山かつおる
6. 介護福祉学生の死生観～死生観に影響を与える要因の分析～ (査読付)	共	2009年6月	鳥取短期大学研究紀要第60号、p. 1~8	介護福祉学生の死生観を明らかにするために、教育課程の異なる2校の介護福祉養成校で学ぶ学生の死生観を調査した。死別体験のない学生はある学生に比し、死を否定的にとらえ、回避する傾向がみられた。死生観は個人の体験により異なる。教授するに際し、基本的知識習得だけでなく、学生への個別対応の重要性の示唆を得た。本人担当部分：アンケート調査、分析、論文執筆を

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
7. 介護福祉学生の死生観～死生観に影響を与える要因の分析～（査読付）	共	2009年12月	鳥取短期大学研究紀要第60号、p.1～8	担当。共著者名：久山かおる、井手添陽子、米原あき 介護福祉学生の死生観を明らかにするために、教育課程の異なる2校の介護福祉養成校で学ぶ学生の死生観を調査した。死別体験のない学生はある学生に比し、死を否定的にとらえ、回避する傾向がみられた、死生観は個人の体験により異なる。教授するに際し、基本的知識習得だけでなく、学生への個別対応の重要性の示唆を得た。 本人担当部分：研究計画検討、アンケート調査、分析、論文執筆 担当（ページ特定不可能） 共著者名：久山かおる、井手添陽子、米原あき
8. 「中高年の地域交流活動と免疫機能・精神健康との関連」（査読付）	共	2008年1月	米子医学雑誌第59巻第55号、p.134～139	（第13回大同生命地域保健福祉研究助成） 地域住民を対象に、地域交流活動と精神健康面との関連について検討した。その結果、地域交流活動に参加することは、生活満足度に影響することが示唆された。免疫機能への影響ははっきりとはでなかった。本人担当部分：研究計画検討、研究助成への申請、調査、データ分析、論文検討（ページ特定不可能） 共著者名：谷垣静子、乗越千枝、仁科祐子、久山かおる
9. 地域交流を通じた学生教育プログラムの検討～くらし国際交流フェスティバル2006の実践から～（査読付）	共	2007年6月	鳥取短期大学研究紀要第55号、p.1～11	鳥取県で開催された「くらし国際交流フェスティバル」を運営するにあたって、地域交流をフィールドにした学生教育はどうあるべきかについて考察し検討した。また、フェスティバル運営を通しての学生たちの変化も分析し、考察した。 本人担当部分：地域交流活動が果たす役割（p4～5）、教員の記録のの説明（p9） 共著者名：荒井優、池谷千恵、國本真悟、久山かおる、高橋千恵子
10. 「我が国の認知症対策の現状と課題～都道府県第3次高齢者保健福祉計画における認知症高齢者施策の分析～」（査読付）	単	2007年6月	鳥取短期大学研究紀要第55号、p.41～51	都道府県の認知症対策、第3次高齢者施策を比較し、認知症対策の現状と課題を考察、①認知症高齢者施策は自治体により取り組みが異なること、②認知症理解の啓発活動は地域によって異なることが明らかになった。著者 久山かおる
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. 第32回日本看護学会シンポジウム 地域看護	共	2000年7月	第32回日本看護学会特別講演・シンポジウム（地域看護）論文集 地域看護シンポジウム・鳥取、p.71～74	地域看護学会シンポジウムとして参加。介護保険制度の中で看護職が看護の専門性を高め、信頼されるケアマネージャーとしてそのライセンスをどう生かしていけばよいか、求められる看護職のケアマネジメントについて提言した。
2. 学会発表				
1. 在宅療養者を介護している家族のレジリエンス尺度の検討（査読付）	共	2017年9月3日	日本家族看護学会第24回学術集会	在宅で療養者を介護している家族のレジリエンス尺度を検討することを目的に、訪問看護利用者の家族および外来診療を受けている患者の家族408名を対象に質問紙調査を実施した。レジリエンスは15項目から構成され、『介護者の対処する力』、『介護者の内面の強み』、『介護者の周囲からの支援』が抽出された。レジリエンス尺度の妥当性、信頼性に関する分析の結果、本尺度は信頼性、妥当性が確保され、在宅療養者を介護している家族のレジリエンスを評価する尺度として使用できると考えられた。共同発表者 新田紀枝、太田暁子、久山かおる、前田由紀、宗岡千春
2. 在宅で療養者を介護している家族のレジリエンスに影響する要因（査読付）	共	2017年9月3日	日本家族看護学会第24回学術集会	在宅で療養者を介護している家族のレジリエンスに影響する要因を明らかにするために訪問看護利用者の家族および外来診療を受けている患者の家族408名を対象に質問紙調査を実施した。重回帰分析の結果、レジリエンス因子に影響する要因として、『介護者の対処する力』では『介護者の内面の強み』、『介護者の対処する力』、『介護者の内面の強み』、『介護者の周囲からの支援』では、『介護者の対処する力』、『患者の年齢』が抽出された。つまり、『介護者の対処する力』、『疲労感』、『膝痛』が、『介護者の周囲からの支援』では、『介護者の対処する力』、『患者の年齢』が抽出された。つまり、『介護者の対処する力』、『疲労感』、『膝痛』が、『介護者の内面の強み』に負の影響を与えることが明らかになった。共同発表者 久山かおる、新田紀枝、太田暁子、前田由紀、宗岡千春
3. 独居高齢者のライフログを用いた健康度と認知機能評価（第2報）—手続き記憶装置による集中力の評価—（査読付）	共	2017年8月29日	日本看護研究学会第43回学術集会	高齢者が1日の自分の生活や感情、身体状況を簡便に記録することが認知機能の向上につながるができるのかを検討するために、自宅でバーコード読み取り機器を使用したライフログの調査を実施した。調査前後にFAB、MMSEを測定し、集中力の評価としてLAB反応計測システムの検査を行った。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
4. 独居高齢者のライフログを用いた健康度と認知機能評価（第1報）—行動特性と心身の健康度との関連—(査読付)	共	2017年8月29日	日本看護研究学会第43回学術集会	FABの値はライフログ後は有意に短縮した。簡便な方法により日常の自分自身の行動や感情に注目すること、バーコード操作に集中することが、認知機能の一つである集中力の向上につながることを示唆された。共同発表 横島啓子、杉浦圭子、うこととする。具体的には、バーコードリーダーを用い、簡単な絵文字を使い自らの状況・感情が発信できるシステムをプログラムし、高齢者から発信された情報を分析する。共同発表者：横島啓子（代表）、杉浦圭子、久山かおる（分担研究者） 独居高齢者を援助するにあたり、簡便な機器を利用し、本人の生活パターンや行動特性を把握することが健康度にどのような関連があるかを明らかにするために、自宅でバーコード読み取り機器を使用した調査を実施した。対象者は地域の中でも活動的・意欲的な高齢者で、ほとんどの高齢者が自立し規則正しく生活をしてきた。しかし、新進の健康度との関連を見ると既往歴など基礎疾患の存在は健康度との関連が深く、生活時間のばらつき、運動習慣なしというような行動特性と共関連がある可能性があることが示唆された。共同発表 杉浦圭子、横島啓子、久山かおる
5. Association of Visiting Nurses' Response With Cancer Patients' Good Death by Awareness of Dying Type(査読付)	共	2017年7月25日	The 21st IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, in San Francisco	本研究では、訪問看護師のアウェアネス理論に基づく終末期認識が終末期のがん療養者の最良の死と関連しているかを調査した。 Akiyama M, Kabayama M, Kuyama K, Kamide K.
6. 地域在住独居高齢者の生活パターンおよび心身の状況の実態(査読付)	共	2017年6月	日本老年看護学会第22回学術集会	本研究は、独居高齢者を援助するに当たり、本人の生活パターンやそれに伴う心身の状況を把握することを重要なことと考え、正確に経時的に実態を把握することをも目的とした。方法は、研究に同意した高齢者13名に在宅でのバーコード読み取り機器を使用し、日常生活の内容をバーコードで読み取ってもらった。その結果、対象者の気象・就寝時間は1週間を通してほぼ一定であった。痛みとうの身体不調と「あせる・切ない」と連動して朝方多く訴えるものや旅行や会合後『楽しい』という気持ちと一緒に「疲れた」と表出するものが存在した。全体の体調の悪さの訴えは夕方から就寝前に多く見られた。本人担当部分 研究計画検討、インタビュー、論文検討 共同発表者 杉浦圭子、横島啓子、久山かおる
7. Awareness of Dying in End-stage Cancer Patients at Home and Visiting Nurses' Response. (査読付)	共	2017年3月	The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars in Hong Kong	死のアウェアネス理論(Glaser&Strauss1965)では「死が間近であるということを知りながらどのように認識しているか(終末期認識)によって、患者や周囲の反応が異なる」という観点から、終末期認識が閉鎖、疑念、相互虚偽、オープンに4つに分類されている。本調査では、終末期がん療養者に対する訪問看護師の対応を死のアウェアネス理論をもとに調査した。その結果、訪問看護師の終末期認識はオープンに分類されることが認められた。共同発表者 Masako Akiyama1,2, Mai Kabayama 1, Kaoru Kuyama2, Norie Nitta2, Kei Kamide
8. 在宅における感染予防管理に関する研究の動向-2007年～2014年の国内文献から看護に焦点をあてて	共	2017年2月	第32回日本環境感染学会学術集会 抄録 p 502	在宅での感染予防管理に関する研究の動向を看護に焦点をあてて明らかにした。その結果、2007年から2009年にかけて増加傾向にあった。研究対象者は療養者が多かった。データ収集方法は質問紙調査による実態調査の研究が40%を占め、研究内容は感染管理の基礎的技術が多かった。今後は、療養者や家族を対象とした面接や観察を取り入れたデータ等の蓄積が必要と考えられた。 共同研究者：鳥ひかり、徳重あつ子、横島啓子、久山かおる
9. 在宅における感染予防管理に関する研究の動向-2007年～2014年の国内文献から看護に焦点をあてて(査読付)	共	2017年2月	第32回日本環境感染学会学術集会、 p 502	在宅での感染予防管理に関する研究の動向を看護に焦点をあてて明らかにすることを目的として、①2007年～2014年の期間で医学中央雑誌、CiNiiを用いて、「在宅」と「感染管理」「感染予防」「感染制御」「感染対策」のそれぞれの組み合わせでキーワード検索を実施後、「在宅」と「感染予防管理」の組み合わせでシソーラスによる主題検索を実施した結果、34件の対象文献があった。その結果、在宅での感染予防管理に関する看護に焦点をあてた研究は①「2007年」から「2009年」にかけて増加傾向であること、②研究対象は「療養者」が多いこと、③、データ収集方法は「質問紙調査」による実態調査の研究が40%以上を占めていた・④研究内容は感染管理全般に関するものが取り上げられ、「感染管理の基礎的技術」が多かった。共同発表者 鳥ひかり、徳重あつ子、横島啓子、久山かおる
10. 独居高齢者を対象としたライフロ	共	2017年12月	日本看護科学学会第37	本研究では1日の自分の生活や感情、身体状況を簡便

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
グを用いた認知機能向上への試み—記憶誘導性順序課題による認知機能評価—(査読付)			回学術集会 (受理)	に記録することが、認知機能の向上につなげられるか検討することとした。2016年10月～12月にライフログの調査を各自約2～3週間ずつ行い、認知機能評価はMMSE、FABを測定とともにLEDスを用いた記憶誘導性順序課題を20回施行した。 独居高齢者13名、平均年齢75.3歳であった。MMSEおよびFABの得点はそれぞれ正常範囲内であり、対象者の認知機能は正常であった。記憶誘導性順序課題では、13人中12名がライフログ実施後の方が測定所要時間が有意に早くなっていた。本調査により対象者は自身の生活等を振り返ることができ、記録の際には、正確な機器の操作が求められた。認知機能と運動機能の両方を刺激することになったことが、順序課題における結果に結びついたものと思われる。本調査では、調査説明、FAB、MMSEの検査を担当した。 共同発表者：杉浦圭子、横島啓子、久山かおる
11. 在宅療養者のレジリエンス尺度の検討(査読付)	共	2017年11月	日本在宅看護学会第7回学術集会 (受理)	在宅療養者のレジリエンス尺度を検討することを目的に、訪問看護利用者および外来診療を受けている患者408名を対象に質問紙調査を実施した。回答は227名(57.2%)、有効回答は215名(54.2%)であった。属性：性別は男性126名(58.6%)、年齢は60歳代以上178名(82.8%)、独居が39名(18.1%)、要介護認定53名(24.7%)、訪問看護利用者33名(15.3%)であった。レジリエンス尺度：レジリエンスは3因子『療養者の周囲からの支援』、『療養者の内面の強み』、『療養者の対処する力』(各5項目)から構成された。
12. 外来がん化学療法を受ける訪問看護利用者とは家族に対する熟練看護師による看護ケアの分析(査読付)	共	2017年11月	日本在宅看護学会第7回学術集会 (受理)	来がん化学療法を受ける訪問看護利用者と家族に対する熟練看護師による看護ケアは213のコード、20のサブカテゴリ、【症状マネジメントをする】【服薬管理をする】【曝露への対応をする】【生活をマネジメントする】【利用者の情緒面を支える】【家族の情緒面を支える】【意思決定プロセスを支える】【多職種と連携する】という8カテゴリーが抽出された。本研究において、熟練看護師は一般的な訪問看護ケアを実施していたがその上に①有害事象の症状・発現時期・対処方法を懸念と予測をして、利用者や家族に伝える、②利用者と家族と一緒にというスタンスでの看護ケアを実施する、③利用者と家族の体験に寄り添い情緒面を支える、さらに、④情緒面に寄り添う意思決定支援、⑤多職種と顔の見える連携を実践する看護ケアを意図的に行っていたことが明らかとなった。 共同発表者：横島啓子(代表)、杉浦圭子、久山か
13. 大腿骨近位部骨折の高齢患者のせん妄・急性混乱の発症時期と発症要因の関連性(査読付)	共	2016年7月	第47回日本看護学会急性期看護学術集会、p.283	大腿骨近位部骨折のため入院・治療を受けた65歳以上の患者49名に対して、【背景・準備因子】【身体・治療因子】【患者因子】【周辺因子】の4つの因子に含まれる項目について診療録・看護記録等からデータを収集した。せん妄・急性混乱の発症率は36.7%で、手術前の発症と術後の発症があり、術後のせん妄発症群では平均年齢が高い傾向にあった。せん妄発症要因のうち有意差を認めたのは【患者因子】のひとつである睡眠障害であり、せん妄発症群では睡眠障害のある患者の割合が有意に高く(p<.05)、半数が入院前から眠剤等を使用していた。睡眠障害はせん妄発症に関与しており、睡眠のアセスメントやケアの見直し、標準化が必要である。共同発表者 梅澤 路絵、横島 啓子、久山 かおる
14. 難病療養者のつらい思いをきくツールとして「センター方式シート」の一部を使用した訪問看護の実践(査読付)	共	2015年11月	日本在宅看護学会学術集会、p.56	神経難病の1症例の結果を通じて、「センター方式シート(認知症の人に適したアセスメント・ケアプラン作成指針として、認知症介護研究研修センターが開発)の一部「私の姿と気持ちシート」を使用して療養者のつらい思いをたずね、療養者の苦悩を明確にすることができ、多職種の支援につながった実践を報告した。共同発表者 畑中文恵、新田紀枝、久山かおる
15. A survey of people with epilepsy living in elderly welfare service facilities in Tottori Prefecture	共	2014年6月	11th European Congress on Epileptology Stockholm	近年高齢者のてんかん発症率が増加傾向にある。高齢者介護福祉施設内でのてんかんのいる人の生活実態を明らかにした。高齢者福祉施設を利用するてんかん患者は多かったが、てんかんに関する研修が行われている施設は少なかった。今後、高齢者福祉施設でのてんかんの研修の必要性があることが示唆された。 共同発表 吉岡伸一、久山かおる
16. 自宅に代わる高齢者ケア施設における認知症高齢者のその人らしい終末期支援のための多職種連携	共	2014年3月	第18回在宅ケア学会	自宅に代わる高齢者ケア施設における認知症高齢者のその人らしい終末期支援における他職種連携の意義について明らかにすることを目的に質的記述的研究を実施した。その結果、11カテゴリーが抽出でき

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
17. 鳥取県内高齢者福祉施設職員のでんかんに関する知識と発作対応の実態調査	共	2014年10月	第48回日本てんかん学会学術集会（東京）	た。(科学研究費助成事業(基盤c)助成「認知症高齢者自らが語る終末期ケアと暮らしを支援するテラードモデルの構築(人見裕江)の一部 共同発表者：足立厚子、人見裕江、中村陽子、佐々木純子、田中久美子、石井薫、徳山千恵美、原田俊子、中平みわ、久山かおる 高齢者福祉施設のでんかんのある人の利用の有無や職員のでんかんに関する教育の経験、発作対応の知識、てんかんのある人への態度について調査をした。てんかんのある人の施設利用割合は高かったが、てんかんに対する講義・授業を受けた者や研修を受けた者は少なく、対処法を知っている者も少なかった。 共同発表者：吉岡伸一、久山かおる、大森眞澄
18. 鳥取県内高齢者福祉施設におけるてんかんのある人の実態	共	2014年10月	第47回日本てんかん学会（小倉）	近年高齢者のでんかん発症率が増加傾向にある。高齢者介護福祉施設内のでんかんのある人の生活実態を明らかにした。高齢者福祉施設を利用するてんかん患者は利用者の2%であったが、てんかんに関する研修が行われている施設は少なかった。今後、高齢者福祉施設のでんかんの研修の必要性があることが示唆された。共同発表者：吉岡伸一、久山かおる
19. グループホーム認知症高齢者への終末期ケア 提供者の思い	共	2012年9月	第43回日本看護学会（老年看護） 広島	グループホームにおける終末期ケアを実施しているケア提供者の意識について「看護資格の有無による相違点」という観点から明らかにした。(科学研究費助成事業(基盤c)助成「認知症高齢者自らが語る終末期ケアと暮らしを支援するテラードモデルの構築(人見裕江)の一部 共同発表者：石井薫、人見裕江、佐々木純子、中平みわ、久山かおる、中村洋子、田中久美子、谷向知他
20. 「認知症高齢者グループホーム職員の看取り体験にともなう思い」	共	2012年7月	第25回看護福祉学会(埼玉)	グループホームの職業上の看取り体験をした職員を対象に看取りをした時の思いを自由記述により調査した。その結果、グループホーム職員は、〈共感性にともなう心理的反応〉(看取りケアの準備不足) (看取りケアにともなうゆらぎ) (力不足からの自責感)のような否定的な思いと、(死生観の醸成)(看取りがもたらす満足感)といった入所者の最後に関わったことによる満足感が見られた。共同発表者：久山かおる、大森眞澄、吉岡伸一
21. 「A県認知症高齢者グループホームにおける看取りの実態調査」	共	2010年9月	第18回日本介護福祉学会(岡山)	る認知症グループホームの看取りの実態、職員の看取り体験を調査・報告した。A県は民間参入が少ないこと、看取りの施設方針やマニュアルは8割で作成されていた。しかし、2割では、看取り方針やマニュアルがない状況で予期せぬ看取りが実施されていることも分かった。本人担当部分：研究全般において中心となり行った。共同発表者：久山かおる、吉岡伸一
22. ターミナルケア教育における視覚教材導入の効果	共	2009年9月	第16回介護福祉教育学会（金沢）	死にゆく人の心と体の理解、死生観育成を目的としてビデオ教材を使用し、その効果を死生観尺度およびレポートにより分析した。その結果、適正なビデオ視聴は学生の肯定的死生観育成に効果を及ぼすことが示唆された。 本人担当部分：考察を共同研究者と検討し、研究全般、論文執筆すべてを担当した。共同発表者：久山かおる、井手添陽子
23. 継続看護による在宅ターミナルの実現～入院中一切のケアを拒否した療養者の事例を通して～	共	1998年10月	鳥取県看護協会発表会	入院中、看護師のすべてのケアを拒否し、心を閉ざした患者が、病院看護師と訪問看護師の連携を通して在宅復帰が可能となり、本人の望む尊厳ある看取りが実現した。在宅復帰が可能となった要因を分析考察し看護連携の重要性を発表した。分析、考察を共に担当した。共同研究者：田邊紀子、久山かおる
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 認知症高齢者看取りに関わる職員の思い調査報告書	共	2013年4月	鳥取県支え愛事業助成報告書	(鳥取県支え愛事業助成)鳥取県グループホーム協会とともにグループホームにおける看取りの実態を調査した。
2. 「介護施設の看取りケア研修会」 「アンケート調査からみえる看取りに関わる職員の思い」シンポジウム「介護施設の看取りについて」	共	2013年1月	日本認知症グループホーム協会鳥取県支部研修会「平成24年度鳥取県地域『支え愛』体制づくり事業」対象事業	介護現場の職員を対象に実施した看取りに関わる際の態度と死生観調査の結果を報告した。シンポジストとして鳥海房江氏とともに、介護施設の看取りと、職員の教育のありかた、心の支え、また事業所の役割について提言した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
3. ランチョンセミナー「実践例における在宅ケアの実態と課題～在宅における終末期ケアを考える～」	共	2011年3月	第15回日本在宅ケア学会（広島）	どうすれば人は住み慣れた地域の暮らしの中で死んでいけるのか。専門職として行えることはなにかを事例を提示し、フロアとディスカッションを実施した。 共同発表者：久山かおる、中村陽子
6. 研究費の取得状況				
1. ロボットを用いた認知症高齢者に対するセルフモニタリングシステムの構築」	共	2017年～2019年	科学研究費補助金基盤研究C	本研究ではセルフモニタリングの手法を軽度認知症高齢者でも実施可能な方法として、音声・画像を記録できるコミュニケーションロボットを用いて実践する。現在コミュニケーションロボットはインターネット環境を必要とするが、インターネット環境を必要としない動作環境を構築し、独居高齢者及び認知症高齢者の介護予防を目的としたシステムを実現することを目的とする。 共同研究者：横島啓子（代表）、杉浦圭子、久山かおる（分担研修者）福尾恵介、徳重あつ子
2. 外来がん化学療法を受ける訪問看護利用者とは家族に対する熟練看護師による看護ケアの分析」	共	2016年	公益財団法人フランスベッド・メディカルホームケア研究・助成団体平成28年度（第27回）助成事業費	外来でがん化学療法を受ける訪本研究において、熟練看護師は一般的な訪問看護ケアを実施していたがその上に①有害事象の症状・発現時期・対処方法を懸念と予測をして、利用者や家族に伝える、②利用者と家族と一緒にというスタンスでの看護ケアを実施する、③利用者と家族の体験に寄り添い情緒面を支える、さらに、④情緒面に寄り添う意思決定支援、⑤多職種と顔の見える連携を実践する看護ケアを意図的に行っていたことが明らかとなった。問看護利用者とその家族に実施する看護ケアについて明らかにした。 共同研究者：畑中文恵（代表）、新田紀枝、久山かおる（分担研究者）
3. ICTを活用した独居高齢者の生活・健康状態把握のためのプログラム開発	共	2016年	平成28年度 科研費学内奨励金	独居高齢者の健康状態・生活リズム・精神状態の日内変動を捉えることができるプログラムの開発を行うこととする。具体的には、バーコードリーダーを用い、簡単な絵文字を使い自らの状況・感情が発信できるシステムをプログラムし、高齢者から発信された情報を分析する。共同研究者：横島啓子（代表）、杉浦圭子、久山かおる（分担研究者）
4. 大腿骨近位部骨折で治療を受ける高齢患者のせん妄発症を予測する看護師の判断	共	2016年	公益社団法人木村看護教育振興財団」	急性期病棟に緊急入院し、せん妄を発症する患者を予測するためにテキストマイニングを用いて明らかにした。 共同研究者 梅澤路恵、横島啓子、久山かおる（分担研究者）
5. 在宅療養者と家族のQOLに影響するレジリエンスの解明と在宅療養支援モデルの構築	共	2015年～2017年	日本学術振興機構科学研究費補助金	基盤研究（c） 研究分担者 在宅療養者とその家族のQOLに影響するレジリエンスの解明と在宅療養支援のモデルを構築することを目的とした。レジリエンスの概念を用いて、在宅療養の原因の疾患や障害に依らない在宅療養者とその家族のレジリエンスを明らかにする。
6. 難治性てんかん患者の地域包括的支援ネットワークの確立と展開	共	2012年～2014年	日本学術振興機構科学研究費補助金	基盤研究C 410万円 高齢者福祉施設におけるてんかんの利用の有無や職員の転換に対する知識、てんかんのある人への態度について研究した。 共同研究者：吉岡伸一（代表）、久山かおる（研究協力者）
7. 認知症高齢者自らが語る終末期ケアと暮らしを支援するテラードモデルの構築	共	2011年～2013年	日本学術振興機構科学研究費補助金	基盤研究C 540万円 介護保険施設における看取りの実態、特に認知症高齢者の看取りケアにおいて、その人らしい看取りが行われているのかあきらかにされていない状況である。そこで、看取りケアの実態を明らかにするために実施した。 共同研究者：人見裕江（代表）、久山かおる（研究分担者）

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2018年2月1日2018年3月17日	日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会実行委員
2. 2017年6月	第19回日本母性看護学会学術集会実行協力員」
3. 2017年2月現在に至る	まちの保健室プロジェクトメンバー 企画・運営担当
4. 2017年12月1日2018年1月31日	日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会抄録査読委員
5. 2016年1月現在に至る	健康まちづくり研究会メンバーとして豊能町での健康まちづくりの企画立ち上げ」
6. 2015年10月2016年9月	第15回アディクション看護学会学術集会 実行委員
7. 2014年10月5日	日本介護福祉学会 奨励論文賞 受賞
8. 2005年2月2012年3月	NPO法人地域福祉ネット理事（訪問看護設立、専門職からの相談、福祉でまちづくりボランティア）
9. 2010年	日本在宅ケア学会 第15回日本在宅ケア学術集会、運営幹事委員、査読委員